



「悔い砕かれた者として」

宮崎 契一

(西部中会 那覇伝道所牧師)

本学非常勤講師

思いがけず、再び神学校での奉仕をさせていただくことになりました。この4月から「旧約緒論」の講義を担当しています。

沖縄からですので、当然オンラインでの授業となります。途中で通信が途切れてしまう(!)アクシデントもあり、対面の授業とは異なる難しさを感じながら、講義に取り組んでいます。

聖書研究の分野は、近年のコンピューターソフトの発達によって、ノートパソコン等があれば、外出先でも簡単に聖書語句の検索や調査等ができるようになりました。一昔前に比べると、驚くほど便利な時代です。これらのコンピューターソフトは、今や聖書研究に欠かせないツールと言えます。

では、単純にこのような現代のツールを使いこなすことができれば、良い伝道者が生み出されるのでしょうか。数年前に私が大学院で聖書の研究を行っていた時、指導教官の教授がしばしば、聖書解釈はその人自身が大事だ、と言われていました。おそらくそれは、結局その人が主の前にどうであるか、ということの意味していたと思います。旧約聖書の詩編には以下の言葉があります。

「もしいけにえがあなたに喜ばれ 焼き尽くす
献げ物が御旨にかなうのなら わたしはそれをさ

さげます。しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ、あなたは侮れません」(詩編51編18～19節)

旧約聖書の時代、焼き尽くす献げ物をはじめ、神礼拝のために種々の献げ物が献げられました。しかし、神はその献げ物自体を喜ばれるものではありません。そのような献げ物自体が御旨にかなうのではない、と詩人は述べています。ここでは、献げ物そのものよりも、むしろそれを献げる礼拝者の心が語られています。それは、打ち砕かれた霊、打ち砕かれ悔いる心です。そのような人の心を主は喜んで受け入れると言われます。そのような心こそ「神の求めるいけにえ」と言われるのです。

牧師は教会の中で重い責任を負った存在です。そうであるからこそ、牧者は主の前に砕かれて、自らの罪を認める悔いる心の人であることが、仕える者として求められているように思います。献身者に与えられる神学校での学びと訓練は時に厳しいものもありますが、を通して、一人一人が主の前に整えられることに意味があると思います。神学校を通して、主に喜ばれる真実の献身者が輩出されることを沖縄の地から願いつつ、私自身も仕えることができればと思います。

夏期伝道報告



本科課程 4年生

牧野 有仕

(まきの ゆうじ)

東部中会

江古田教会所属

私にとって最後の夏期伝道は、7月が北中山伝道所、8月が熊本伝道所でした。北から南へと大移動した夏でしたが、東北の教会も九州の教会も、これまで一度も訪れたことがなかったため、神学生時代の最後にこうした経験が与えられたことを心から感謝しています。

北中山伝道所では「1週間に1つの説教をつくること」に集中して欲しいということで、平日の奉仕は特にありませんでした。ある程度の自由が与えられているなかで、1週間という時間をどのように使うのかということが大きなチャレンジでした。部屋にこもっているだけでは良い説教はできないと思い、平日もできるだけ多くの方とお話ができればと願っていましたが、主はその願いを聞き入れてくださいました。何人かの教会員の方のご自宅を訪問したり、反対に北中山伝道所に来てくださって牧師館でゆっくりとお話をしたりする時間が与えられました。これまで私は「訪問」の意味をあまりよく理解していませんでしたが、そこでは普段日曜日の空いた時間だけでは話すことができないような信仰の証などをお聞きすることができ、お互いのことを深く知ることができる場である

ということを知ることができました。

熊本伝道所では、月曜日から金曜日の朝6時から朝禱会が行われており、そこに毎日出席することができました。今年の8月の熊本は記録的な大雨が続き、なかなか外に出ることができず、心も体も弱ってしまうときがありましたが、毎朝の朝禱会で御言葉の前に静まり、祈る時間が与えられたことが、私の霊の支えとなりました。夏期伝道の集大成として、これまで学んできたことを活かして十分な働きができたかと言えば、全くそうは思いません。説教づくりもなかなか思うようにいきませんでした。しかし、神様は最後の夏期伝道で私に一つのメッセージを残してくださったのだと思います。「自分の力ではなく、ただ私に依り頼みなさい」。



牧野有仕 北中山伝道所、熊本伝道所

三野豊 宝塚教会、めぐみキリスト伝道所

金 慶熙 平和の君伝道所、山田教会

山口英俊 甲信地区、徳島西部伝道所

田好愛基 山田教会、那加教会

金 奎承 伊丹教会、北中山伝道所

牧田創 秩父教会、西鎌倉教会



本科課程 3年生

金 慶熙

(キム キョンヒ)

東部中会

坂戸教会所属

坂戸教会のT君は、教会の名簿を見るのが好きで、将来牧師になることを夢見ています。無牧教会が増える一方で献身者が減少している現状の中、そのような子どもの夢は、まさに希望に満ちた知らせだと感じます。

この夏、私は7月に広島の平和の君伝道所で、8月には高知の山田教会で、夏期伝道の奉仕をさせていただきました。平和の君教会は、被爆地・広島にあって「平和の福音」を掲げ、少人数ながらも礼拝と祈禱会を大切に守り続けておられます。また、山田教会は木造の美しい礼拝堂をもつ教会で、教会の方々が祈りをもって教会を支え、読書会などを通して地域に仕えておられます。

両教会にはそれぞれ異なる地域性や課題がありますが、牧師の不在という厳しさの中にあっても、礼拝を中心に信仰を守り、主に忠実に仕える姿がありました。そのような教会で、わずかな賜物であっても主に用いられ、奉仕できたことは、すべて主の恵みでした。

私は夏期伝道に備えて地域を調べ、何をなすべきか計画も立てて臨みました。しかし、「人は心に自分の道を思い巡らす。主がその人の歩み

を備えられる」(箴言16章9節)の御言葉のとおり、主の御手の中ですべてを導いてくださったのは主ご自身でした。また、教会の方々が夏期伝道のために祈り、準備してくださり、この乏しい者を温かく迎え入れ、誠意をもって支えてくださいました。私にできたことは、ただその愛に対して、愛をもって応えることだけでした。

こうして過ごした二か月は、地方教会の現状を少しでも理解する機会であると同時に、感謝と喜びに満ちた時となりました。そして、どんな状況であっても信仰の道を歩み、教会を支える信徒の愛と献身に深く教えられました。この夏に与えられた恵みを覚えつつ、両教会をはじめ諸教会のために祈り続けてまいりたいと願っています。





本科課程 3年生

田好 愛基

(たよし あいき)

東部中会
江古田教会所属

「草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。」(イザヤ書40章8節)

今年の夏期伝道の間、いつも私の心にあった御言葉です。2回目となる夏期伝道は、7月に山田教会、8月に那加教会へと遣わされました。その夏期伝道は、思いがけない2人の方の召天の連絡から始まりました。どちらの方も通年派遣教会でお世話になった方々です。6月にもお会いしたばかりでしたので、私は大きなショックを受けました。そして、私以上に衝撃と悲しみを経験しておられるご遺族の方々に、何の言葉もかけることができませんでした。自らの無力さを突きつけられる中で、最初の主日に与えられた御言葉が冒頭のイザヤ書40章の御言葉でした。私自身は何の力もない存在だけでも、悲しみの中にある方々を慰める言葉を持っていないけれども、とこしえの神の言葉がその状況を突き破られることを示されたのです。

説教とは、この唯一の希望である神の慰めを説き明かすことであると思われました。こうして、神様が与えてくださる慰めを大胆に取り次ぎたいという思いに駆り立てられて、2か月間を走り抜くことができました。

多くの恵みが与えられました。両教会のみなさ

んとの豊かな交わりがあり、たくさんの新たな出会いがありました。教会員のみなさんが説教を通して受け取った恵みを分かち合ってくださいしたことも本当に感謝です。同時に、いくつかの課題も明らかにされました。その一つは、私の中に神学的基盤が無いということです。説教の準備をする中で、自らの神学的確信の弱さに気づき、説教の言葉が見つからないということがしばしば起こりました。神学校での学びは既に半分以上が経過していますが、恥ずかしながら、私が神学を学んでいるのは何のためであるのかが初めて分かったように思います。説教を通して語られる御言葉が、一人一人にとって本当に慰めの言葉となるように、より一層熱心に神学の学びに励みたいと願っています。私を受け入れてくださった両教会のみなさまに心から感謝を申し上げます。



本科課程 3年生

牧田 創

(まきた はじめ)

東北中会
仙台教会所属

今年度も7月は秩父教会、8月は西鎌倉教会で、多くの素敵な出会いに恵まれ、豊かな訓練と奉仕の時を持つことができました。準備をしてくださった方々、また夏期伝道を支えてくださった方々に心から感謝申し上げます。

今回の夏期伝道では、多くの方々とゆっくり話す機会に恵まれました。そのような対話の中で、これまでに経験されてこられた痛み、今抱

えておられる困難や苦しみについて語ってくださる方もおられました。私たちは日曜日に笑顔で挨拶を交わし、言葉を交わし、礼拝や集会を終え、教会を後にすることがあります。しかし実際は誰もがその笑顔からは計り知ることのできない重荷を抱えながら教会に集って来るのだと思います。誰もが、切実に、神に出会うことのできる礼拝、神の言葉が語られる説教を求めているのだと思います。「当たり前のことだ」と思われるかもしれませんが。しかし私たちはそのような現実を、極めて具体的な個人的対話を通してのみ、少しずつ理解し得るのだということを、私は経験的に知ることができたように思います。そして、それは私にとり、決して小さいことではありませんでした。

夏期伝道中には、学校の課題で礼拝に参加



してくださった中学生の親子や、教会の礼拝に生まれて初めて出席してくれた高校生もいました。7月に訪れた秩父は、町の中心に大きな神社があり、秩父教会はそこで一つか二つしかない毎週礼拝を守っている教会でありました。そのような状況の中、説教の目的について常に考えることになりました。説教には「教会を建て上げる」という目的と共に「神の民を集める」という大切な目的があります。特に日本にある教会にあつては、講解説教がなされるにしても、それが同時に伝道説教でもあることが意識的に目指されるべきではないかとも考えさせられました。説教とは何か、特に日本の改革派教会における説教はどうあるべきか。それが今回の夏期伝道を通して、私に与えられた問いでありました。



本科課程 3年生

三野 豊

(みの ゆたか)

東部中会
東京恩寵教会所属

主の御名を賛美いたします。今年度、私は7月に宝塚教会、8月にめぐみキリスト伝道所において、夏期伝道の奉仕をさせていただきました。

7月に奉仕をさせて頂いた宝塚教会では、博士論文執筆のために一ヶ月間お休みされていた大西先生に代わり、主に主日礼拝と水曜祈禱会の奉仕を担当しました。宝塚教会で印象的だったのは、礼拝後も多くの方々が礼拝堂に残り、交わりの時を持っておられたことです。礼拝後、パソコンを前に置いてオンラインで出席された方々とも親しく語り合う姿が見られ、その温かな雰囲気がとても心に残りました。一ヶ月の奉仕を通して気づかされたのは、教会全体が和やかな雰囲気に包まれている背景には、教会が多くの人にとって居心地のよい場所となるように、礼拝の内容に至るまで細やかな配慮がなされているということでした。神

様に招かれたという共通点を除けば多様な人々が集う教会をどのように建て上げるかという点で、宝塚教会から多くのことを学ばされました。

8月に奉仕をさせて頂いためぐみキリスト伝道所は、長年にわたって無牧の状態でおられる教会です。特に印象的だったのは、教会員お一人お一人の奉仕と礼拝に対する真摯な姿勢でした。教会運営に関する多くの事柄を教会員自身が担っておられることも含め、教会に積極的に関わろうとする強い思いが伝わってきました。その信仰の深さに胸を打たれ、ま

た、神学生である私の拙い説教にも真剣に耳を傾けてくださる姿に、身の引き締まる思いがしました。8月末には子どもたちを対象としたアイスクリームパーティーを開催しました。地元の子どもたちが大勢集まり、椅子が足りなくなるほど教会が人でいっぱいになり、祝福された時を過ごしました。今後も地元の子どもたちやそのご家族が教会に繋がるように祈っています。

この夏期伝道を通して多くの学びと恵みを与えてくださった皆様に、そして何より神様に心から感謝いたします。



本科課程 3年生

山口 英俊

(やまぐち ひでとし)

中部中会
豊明教会所属



今年の夏期伝道は7月は甲信地区にある4つの教会に遣わされ、長野まきば教会の長野会堂と佐久会堂(牧野信成牧師)、上諏訪湖畔教会(無牧師)、山梨栄光教会(村手淳牧師)のそれぞれ1回ずつの説教奉仕を、長野会堂と上諏訪湖畔教会では祈祷会の奉仕もさせて頂きました。

8月は徳島西部伝道所(無牧師)で、毎主日の説教と祈祷会の奉仕を担わせていただきました。

学んだ中から3つ報告いたします。一つは会堂(7月は長野会堂と上諏訪、8月は徳島西部)に住むことによって、牧師の気持ちを実感できたことです。教会の皆様を思い浮かべながらの説教準備、主の日に信徒を迎えるときの嬉しさ、そして礼拝を終え送り出す時のちょっと寂しい気持ちなど、主から委ねられたお一人お一人がとても愛おしく感じました。そして、皆様の忠実な信仰に牧師自身が励まされ、支えられていることに気づいたのです。

二つ目は、御言葉を語る者の責任です。1週間の労働で疲れがたまっている、また、病などで不自由なお体であっても、忠実に礼拝に集われる方々に対し、今日の説教は心に響いたかどうかと毎回問われ、自分の説教の拙さを思い、反省の繰り返しでした。毎週の説教は、聞く者にとって1週間の生きる力であるという説教の重み…。自分の力ではとうてい担うことはできません。ただ、ただ、主から力をいただくしかありません。

最後に、長老、執事、伝道所委員の皆様の献身の尊さです。働き人が少ない中、それぞれ役割を分担して献身的に教会を支えておられます。お一人お一人が主を証ししておられました。なんと尊い働きでしょうか。主イエスが、

ご自分の体を支えている働き人を祝福されないはずはありません。

主に愛されている教会での二ヶ月間でした。このような貴重な体験をくださった皆様のために、これからも祈り続けたいと思います。ありがとうございました。



特別研究課程2年

金 奎承

(キム ギュスン)

在日大韓基督教
明石教会所属

この夏、私は家族とともに日本キリスト改革派教会の夏期伝道に参加する恵みをいただきました。家族全員で奉仕できたことは、神様からの大きな祝福であり、将来の日本宣教と牧会の働きを具体的に考える貴重な機会となりました。

7月は伊丹教会で奉仕し、子ども礼拝や日曜学校、主日礼拝、水曜祈禱会で御言葉を取り次ぐ機会が与えられました。吉岡先生のご指導のもとで説教原稿を整える中で、まず自分自身が神の声に聞く者として整えられていくことを実感しました。また、執事会や各伝道会に出席し、一人でも多くの方々と交わりながら、日本の教会の現場を実際に体験することができました。さらに、信徒の皆様とバイブルサロン(ウェストミンスター小教理問答)を共に学ぶ機

会が与えられたことも恵みでした。特に、日本で初めて出席した葬儀では、信仰に立つ礼拝の姿と、悲しみの中にある信徒の信仰に深く心を打たれました。

8月は北中山伝道所に滞在し、主日ごとの礼拝奉仕を中心に働きを担いました。拙い説教原稿を丁寧にご指導くださった尾崎純先生に、心より感謝いたします。毎週の礼拝のほか、亘理伝道所・福島伝道所・東仙台教会・仙台教会でも御言葉を取り次ぐ機会が与えられ、各地で信徒の皆様と温かい交わりを持つことができました。

特に印象に残っているのは、福島伝道所で初めて教会にきた高校生三人、そして北中山伝道所の礼拝に参加した中学生や二人の女子高校生の姿です。彼らが真剣に御言葉を聞いていた姿を通して、「どのようになれば再び教会へ導き、信仰に根づかせることができるか」という大きな課題を与えられました。また、外面的には親切でも、なかなか心を開かない日本の方々にとどのように寄り添い、キリストの愛を伝えるかという問いも深く心に刻まれました。

今回の伝道を通して、福音を待ち望む人々が確かに存在することを知り、私自身がどのように仕え、御言葉を証していくべきかを学び

ました。すべてを導かれた主に栄光を帰しつつ、祈りをもってこの恵みを次の歩みへとつなげてまいりたいと思います。



New Books

10月に、神学校関係の3冊の新刊が出版されました。リフォームドパンフレット13は、2025年7月の第47回夏期信徒講座の書籍化です。そこでは80周年宣言作成委員会のそれぞれによる講演が、文字起こしによる臨場感溢れるかたちで収録されています。今や幻となった80周年宣言第三次草案も巻末に収録されています。

また時を同じくして、本学古代史講師の柏木貴志先生による2024年7月の第46回夏期信徒講座の内容も、リフォームドパンフレット14として書籍化されました。アウグスティヌスに深い造詣をお持ちの柏木先生だからこそ、アウグスティヌスの内面を読者と共に掘り進むような、比類のない講演集です。

そして、まだ日本語訳聖書も整えられていない時代に日本のキリスト教の基礎を築いた、植村正久の神学思想についての総合的な記述となる『〈植村正久〉を読む』を、本学日本キリスト教史講師の木下裕也先生が、神学校の出版資金援助制度を用いて上梓されました。現代の教会にも少なからず影響を与えている日本キリスト教史の源流に触れることができます。

- 80周年宣言作成委員会（石原知弘、吉岡契典、石原幸彦、大西良嗣、坂井孝宏）
『80周年宣言 “神の国を今ここに”』
リフォームドパンフレット13
神戸改革派神学校、2025年。〔定価700円〕
- 柏木貴志『397年のアウグスティヌス』
リフォームドパンフレット14
神戸改革派神学校、2025年。〔定価800円〕
- 木下裕也『〈植村正久〉を読む』
一麦出版社、2025年。〔本体2,800円+消費税〕



夏期信徒講座

今年の7月4日(金)から5日(土)にかけて、神戸改革派神学校第47回夏期信徒講座が開催されました。10月の大会での採択を目指して作成されていた、「創立80周年宣言『神の国をここに』」第三次草案を題材に、80周年宣言作成委員会の皆さまを講師にお迎えして、全5回の講演をしていただきました。これまでの宣言の歴史や、今回の宣言の意義、その目指すところについてなど、様々な角度からお話を聴くことができました。

今回の「80周年宣言」は、「創立宣言」と「20周年宣言」に続いて、改めて日本キリスト改革派教会のアイデンティティを確かにし、更にこの先の時代へと方向づけていく宣言です。わたしはこの夏期信徒講座ではじめて宣言の草案を読んだ時、神の国をさまざまな角度から捉えて、その実現を真剣に祈り願い、行動していくために背中を押してくれるような文章だと感じました。講師をしてくださった委員の皆さまを通して、はじめて「創立宣言」を学んだ時にも通じる熱量が伝わってきて、この信徒講座は本当に素晴らしい機会だったと思います。特に、坂井先生の講演で「日本キリスト改革派教会は錨のように安定して『真に聖書的な教会』を追い求める存在」と語られていたのが印象に残りました。目まぐるしく変化していく世界の中で、神の言葉にしっかりと立ち続ける教会の働き人になりたい

という思いが強められました。

また、神学校を会場としての開催は、9年ぶりでした。神学校の建物が神学生だけでなく、多くの方が共に学ぶ場として用いられることへの喜びを感じられる2日間となったことを、心から主に感謝します。これからの信徒講座にも多くの方が参加してくださることを願っています。

そしてこの夏期信徒講座の全講演内容は、神学校が発刊している「リフォームド・パンフレット」にてお読みいただけます。会場やオンラインで一度お聴きになられた方も、創立80周年宣言作成の軌跡を改めて味わってみてはいかがでしょうか。

畑中理和(1年生)



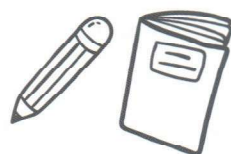
去る2025年9月26日、日本キリスト教会神学講師・東京主僕教会牧師の真田泉先生をお迎えし、『託された務めに仕える—キリストとの結合と参与』の視点から—』と題して特別講義をいただきました。最初にくつかの教派の教会憲法（規程）が紹介され、その背後にある「キリストとの結合」の神学を主題として講義が展開されました。

第一部では、「キリストとの結合」について、カルヴァンの理解や証拠聖句を引用しながら、神学的な解説がなされました。特に印象に残ったのは、キリストに結ばれている人は、主がご自身の血によって成就して下さった新しい契約の中にあるということです。決して破られることのない神の契約の確かさによって、わたしたちはいつまでもキリストと結ばれ続けるという祝福に与っていることがわかりました。またキリストとの豊かな交わりの中へその人を招くという伝道の考え方を学びました。わたしたちは、イエスがご自身との交わりの中へ導こうとされている人に、イエスの存在を証しする務めが委ねられており、イエスは、わたしたちの務めを用いつつ宣教の業を進めておられることが理解できました。

第二部では、「受肉に基づくミニストリー」が取り上げられました。これは地上に来られ、貧しい人々と生活を共にしながら宣教をされたイエスの奉仕を体現するという宣教活動を指しますが、奉仕者が自分を受肉前のイエスに重ね合わせ、あたかも受肉した神のごとくに振る舞う独善に陥る危険性が指摘されました。そして、わたしたちのミニストリーとは、「キリストとの結合」に基づいて世に派遣され、キリストにおいて一つであることを証しすることであり、その務めをキリストの三職に関連づけて内容豊かに語られました。

「キリストとの結合」の重要性がよく理解できました。教えてくださった真田泉先生に心から感謝をいたします。

山口英俊（3年生）



後期開講講演会



11月3日の後期開講講演会をもって、神学校の後期の歩みが始まりました。神学生は翌11月4日から6日にかけて能登半島での支援活動（傾聴ボランティア）に派遣されましたが、今回の講演会のテーマ「『寄り添う』を考える」は、その活動の備えともなりました。福西裕子先生を通して、大変有益な学びの時間が与えられましたことを主に感謝いたします。

講演の初めに、「寄り添う」という言葉が多用されるようになってきたことが指摘されました。寄り添うことが社会に浸透してきたという反面、それが軽く扱われることを先生は危惧しておられました。実際、講演を通して感じたことは、寄り添うことは簡単ではないということです。寄り添うとはどういうことか、言葉の定義、聖書のモデル、具体的にどのようにそれを行うかということまで、多岐にわたって、また分かりやすく教えていただきました。そのため講演の詳しい内容をここでご紹介することは難しいのですが、講演を通して私が考えさせら

れた一つのことを分かち合いたいと思います。「寄り添う」とは何か。どのようにして「寄り添う」ことができるのか。私なりの結論は、寄り添うとは自らの「存在をかける」ことであるということです。傷ついた人、悲しむ人と共にいること、真摯に目と耳と心を傾けること、その人のために祈ること。さらに、私自身の寄り添いは不十分なものでしかないけれども、私を通して神様がそのご存在をかけてくださるという事実にゆだねること。私自身にも神様が寄り添ってくださっているということの中で、私も寄り添うことができるのだと思われました。まさにイエス・キリストこそが存在をかけて私たちを愛し、寄り添ってくださるお方であることを覚えます。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」（ヨハネ15章13節）

田好愛基(3年生)



韓国オンヌリ教会来訪

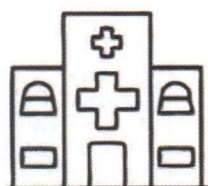
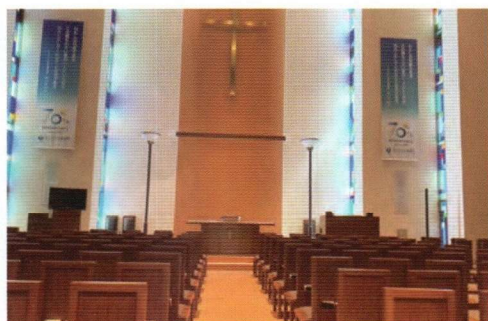
昨年に引き続き、韓国のオンヌリ教会の方々が私たちの神学校を訪問してくださいました。10月31日には43名、11月1日にはなんと143名もの方が来てくださり、普段は味わうことができないような主にある良き交わりが与えられたことを心から感謝しています。チャペルの時間には宗教改革記念日を覚えて、ルターがつくった「神はわがやぐら」を日本語と韓国語でともに賛美しました。言語を越えて、ともに神様を賛美するなかで、天の国でキリストに結ばれた者が一つになって神様を賛美する日が早く来て欲しいという思いが強くされました。また、礼拝の最後に行われた「連合祈禱」という時間もとても印象に残っています。一人の牧師先生が前に出て祈禱課題を述べます。するとその祈禱課題に合わせて一人一人が声に出して祈り始めるのです。そしてしばらく経つと、また牧師先生が祈禱課題を述べて、皆がそれに合わせて祈る。これを何度も繰り返すのです。日本ではあまり馴染みのない祈りのスタイルですが、皆が同じ事柄について心を合わせて祈るその祈りは、一つにされて神様に届けられているんだということを感じさせてくれるものでありました。

二日目に来訪された方々はオンヌリ教会の長老候補として選ばれた人たちが通う「長老士官学校」での1年弱の学びを終えて、まもなく長老になろうとしている方々でした。その学校では、約100回のレポート提出が求められ、一度の欠席もゆるされないという非常に厳しい訓練が行われているそうです。しかし、単に知識を詰め込むような訓練ではなく、何よりも大切にしているのは「深い霊性」と「あたたかい心」であるということを教えていただきました。そこで言われていたように、訪問して下さった方々からは確かに「深い霊性」と「あたたかい心」が溢れていました。オンヌリ教会の方々との出会いを通して、私たちの霊と心も燃え立たせられていくことを主に期待しています。

牧野有仕(4年生)



チャプレン実習報告



9月22日から25日までの4日間、「牧会ケア」の授業の一環として、淀川キリスト病院でCPE（Clinical Pastoral Education）の実習を行いました。CPEとは、臨床現場において「寄り添うケア」を体験的に学ぶプログラムであり、チャプレン（病院付牧師）の働きを通して、患者や家族、医療スタッフへの霊的ケアを実践的に学ぶものです。

淀川キリスト病院は、戦後の大阪において「キリストの愛をもって人々に仕える」という理念のもとに設立された医療機関です。病院の一日は、創立以来続く朝の礼拝から始まります。病院の中心に位置する天井の高い吹き抜けのチャペルでは、毎朝8時30分から15分間、多くの職員が集い、聖書朗読と短いメッセージ、祈りの時を持ちます。参加する人々の多くは未信者の方々ですが、厳粛な空気が流れ、神の臨在を感じました。また、午後1時30分にはチャプレンによる院内放送が行われ、入院患者やスタッフがそれぞれの場所で耳を傾けています。

実習では、病棟訪問やICUでのチャプレンの働きを見学し、患者や家族と真摯に向き合う姿を間近で見ました。医療の最前線で「魂のケア」を担うチャプレンの働きは、単なる補助的支援ではなく、苦しむ人々の命を支える中心的な働きであることを学びました。その務めは、言葉による説明よりも、「共に在ること」を通して神の愛を証しすることにあります。その中で、福音の慰めが働いていることを感じました。

「寄り添う」とは、単に共感することではなく、相手の痛みを共に担い、祈りつつその歩みに伴うことだと教えられました。そして、苦しみのただ中で涙を流す患者の傍らにおられるチャプレンの姿の中に、まるでイエス・キリストご自身の救いの御業が現れているのを見たように感じました。

短い実習でしたが、今後牧会に携わる神学生一人ひとりにとっても、福音の慰めと希望を現実の中で見つめ直す、貴重な学びの機会となることでしょう。

金慶熙（3年生）



韓国
オンヌリ
教会
との
交わり



能登半島
ボランティア
11月4～6日



ルーテル
神学校
合同シンポジウム



前期

- 3月20日(金・休)・第74回卒業式
4月10日(金)・第77回入学式、前期開講講演
(講師:ディビッド・サイツマ先生)
6月4日(木) - 5日(金)・神学校リトリート(講師:山下正雄先生)
24日(水)・夏期伝道派遣式
25日(木) - 28日(日)・説教合宿(於雀のお宿)
7月1日(火) - 8月31日(日)・夏期伝道(2~4年生)
7月3日(金) - 4日(土)・第49回夏期信徒講座(講師:牧田吉和先生)
7月7日(火) - 8月28日(金)・ギリシャ語文法集中講義(1年生)
8月8日(土) - 16日(日)・神学校夏期全休
9月8日(火)・授業再開
10月2日(金)・前期最終講義
6日(火) - 9日(金)・リーディングピリオド(含補講)
13日(火) - 16日(金)・前期試験
-

後期

- 11月3日(火、休)・後期開講講演(講師:大西良嗣先生)
6日(金)・神戸ルーテル神学校とのシンポジウム
12月18日(金)・クリスマス礼拝・冬期休暇前最終講義
25日(金) - 2027年1月3日(日)・神学校冬期全休
5日(火)・授業再開
12日(火)・入学願書締切
29日(金)・全校祈祷日
2月9日(火)・入学試験
3月5日(金)・後期最終講義
9日(火) - 12日(金)・リーディング・ピリオド(含補講)
16日(火) - 19日(金)・学期末試験
22日(月)・第75回卒業式
4月9日(金)・第78回入学式

神戸改革派神学校

2026 年度新入生募集案内

激しい時代の変化の中で、変わることのない神の国の福音の希望を伝えるために、あなたの人生を主に献げてください！

本科課程 (4年制)

教職養成課程です。ゆとりある充実した授業とともに実践面を強化します。

★願書締め切り

2026
1/10(土)

短期課程 (2年制)

教会に献身する信徒のためのコース！
信徒説教者・信徒リーダーなど教会献身者の神学教育のために。

★入学試験

2026
2/10(火)

特別研究課程・ 聴講制度あり

*2025 年 4 月からオンラインで聴講ができるようになり、大変好評をいただいております。是非御利用ください。

まずは
お問い合わせ
ください。



〒651-1306 神戸市北区菟蓐ヶ丘3-1-3
神戸改革派神学校



078-952-2266/(Fax)2165



rcj-kobe2266@nifty.com



www.krts.net